

『グローバル天理』第7号（通巻31号）掲載論文要旨

井上昭夫 「サッカーW杯熱狂の彼方に見えるもの」

サッカーW杯は、日本の決勝トーナメント進出によって日本列島を興奮の渦に巻き込んだ。テレビの視聴率は68%という驚異的な数字を示し、日本の新聞も全紙がスポーツ紙面化し、報道も競技化した。しかし本当のサッカーの魅力は、この美学・倫理的な領域にあるのであって、それは本来スポーツが持つ深い人間性に根ざした宗教的な要素にも底辺において繋がっているのではないか。

荒川善廣 「「元の理」の探究（16）—人間と存在〔7〕」

親神と教祖の魂との関係は、永遠(eternity)の次元と現実(actuality)の次元で重層的に考えられる。永遠の次元における魂の場所(locus)で、親神は無数の可能性(potentialities)をはらんでいるが、それらは親神の精神性(mentality)を意味している。他方、現実の次元における魂の場所では、親神はこの世のすべての出来事(events)を総合統一するが、それらは親神の身体性(physicality)をかたちづくっている。教祖存命の理とは、教祖の魂が「月日のやしろ」として、そこにおいて親神の身体的統一が達成される場所として機能し、親神とともに現実に人間救済のために働かれているという消息を示している。

宮田元 「宗教・スポーツ・教育（11）—宗教とスポーツ〔9〕」

オーバーマンはウェーバーがとり上げたプロテスタントの倫理が、文化的な力として、アメリカにおいてスポーツとレクリエーションにどのような影響を与えたかを考察している。カルビニズムを基盤とする英国のピューリタンの伝統は、アメリカ文化のバックボーンを形成していく上で大きな力となっている。ピューリタンは、禁欲と労働を重視し、怠惰と娯楽に対して不寛容な態度をとり続けてきたが、社会的状況の変化に伴い、スポーツに対する態度の修正を余儀なくされる。しかし道徳的禁欲主義は本来遊びの要素をもつスポーツをまじめなスポーツに変貌させるのである。ピューリタンは、アメリカにおいてスポーツの純化(purify)を試みたと指摘されている。

末延岑生 「ことばと教育（16）—ことばの元を探る〔16〕」

親神はちょうど親がわが子の遠足のお弁当を作るときのように、子供の喜びそうな材料を緻密な設計の元に組み込んでくれている。人は遠くかなたの宇宙の果てや、世界の七不思議のよ

うなものには不思議さと畏敬の念を示すが、最も身近な自分自身の存在にはあまり不思議さを感じないし、感謝する域にまではまだ行き着かないようである。借り物の姿を今一度ここで吟味し、借り物を使わせていただく大自然の不思議さのなかに畏敬の念を肌で感じるとき、感謝が連続のものとなる。

では、人間の体内から、感謝の気持ちはどのようにして生まれてくるのか、ここで「感謝を生む器官」についてその機能を調べてみたい。まず、その司令塔である脳について述べる。脳は、“感謝器官の司令塔”であり、中でも人間が最も人間らしく生きるための、ことばの仕込みの歴史を秘めた貯蔵庫でもある。

単なる動物の域を超え、理性ある人間として、さらに、人間が親神が望むような、真に人間らしく、“うまく（適応行動）、よく（創造行為）生きる”成人のための、最も重要な人間の究極目標である“陽気ぐらし”のための器官として、親神は人間に大脳皮質（新皮質）を貸し与えた。大脳皮質の表面にはさまざまな領野があり、ヒトの場合、さすがに他の動物と違って口、舌、指の領野がはるかに大きいのが特徴である。そのことはとりもなおさず、人間が高度な言葉をしゃべる動物であるという側面をはっきりとあらわしている。そしてそこは、人間を構成する基本となる細胞、そしてそこから構成されたあらゆる器官をうまく、よく統括するための、あらゆるコミュニケーション手段が備わっている司令塔でもある。

これこそが、太古より人間が親神から借り受けてきた“借り物”としてのからだの器官である脳のうちでも、とびきり貴重な借り物のひとつとっていいだろう。小脳は陽気ぐらしを営むための最善の方法・手段を考え、“陽気ぐらし指令器官”と捉えることができる。

小滝 透「天理比較神秘論への試み（31）宗教と世俗〔3〕」

今回は、宗教と科学の関係について考えてみた。とりわけ、両者の関係をキリスト教と天理教の比較において検討してみた。その結果、前者が宗教と科学の二者選択の立場を取り、そのいずれかに傾斜してしまうのに対し、後者の場合は両者を融合する傾向が色濃く見られることがうかがえた。サイエンスを媒介にした西欧と日本の文化的比較においても興味ある問題であると思われる。

堀内みどり 「天理異文化伝道（29）天理教のコンゴ伝道〔28〕—ノソング会長就任〈1971—1989〉〔2〕」

1972年2月12日、高井の3代会長就任奉告祭が執行された。しかしノソングはおちばに滞在し、式には参列しなかった。当時のアフリカでは、各方面の指導者が白人から現地人へと移行していた。彼の不在は、ノソング自身の「何故自分は会長になれないのか」という気持ちを

表現しているとも思われる。種々の行き違いがあったものの1974年秋、ノソングの4代会長が内定した。

塩澤千秋 「脳死・臓器移植—カナダ通信（23）研究方向の修正〔2〕」

臓器移植、胚性肝細胞の医療への利用は多くの問題を抱えている。しかし、これらは唯一の、しかも必要な方法なんだろうか。人工臓器の開発にも目を向ける必要があるのではないか。

特別掲載：第2回天理スポーツ・ギャラリー展関連シンポジウム2002（3） パネルディスカッション「天理ラグビーの真髄と人材育成」

本 パネル討論は櫛引英吉氏（やまのべラグビー教室指導者）、田中伸典氏（天理教葛原分教会長）、八ツ橋修身氏（神戸製鋼ラグビー部員）、藤本雅夫氏（天理教 谷村町分教会長）、後藤洋一氏（天理教愛布教所長）、川村幸治（日本ラグビーフットボール協会理事）の以上、6名のパネリストに、後藤典郎氏（天理高等学校一部ラグビー部長）を司会に進められた。本稿では、パネル討論の前半部の内容を紹介。まずは、司会者によるパネリストの略歴紹介、次に、櫛引氏がラグビーの「真髄」について切り出し、ジュニア選手の育成法に言及した。続いて、先の内容を受け、川村氏が指導法に関する私見を述べた。本稿の最後は、元日本代表選手である田中氏が現役時代のエピソードに触れながら、天理ラグビーで培った精神を、お道の実践との関連から述べた内容で締めくくられている。